

とんぼのめがね

あきつ松風通信 第188号

2023. 3. 26

臼井 勲

Date [使徒の働き] (66)

「私はカイザルに上訴します」(使徒 25:1-27)

「ところが、エタヤ人たちの機嫌を取ろうとしたフェストウスは、パウロに向って、「おまえはエルサレムに上り、そこでこれらの件について、私の前で裁判を受けることを望むか」と尋ねた。すると、パウロは、「私はカイザルの法廷に立っているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。……この人たちが訴えていることに何の根拠もないとすれば、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカイザルに上訴します。」……数日たって、アグリッパ王とベルニケがフェストウスに、「私もその男の話を知りたいものです」と言ったので……翌日アグリッパとベルニケとは大いに威儀を正して到着し、千人隊長や町の有力者たちとともに謁見室に入った。」

先回は、エタヤ総督フェリクスとその妻ドルシラとが幽閉中のパウロのところを訪れ、彼の説教を聞いたエピソードを学びました。フェリクスはパウロからアピロを取ろうなどと考え、パウロを2年の長期にわたってカイザリアに監禁したままにしていました。その間に、エタヤ総督が交替してフェストウスになりました。このフェストウスについては、エタヤ史家ヨセフスの記録にも残っていて、ローマの行政官として仲の敏捷な能吏であったと言われています。ルカもその点は正確に促していて、彼は総督の任に当るや、すぐにエルサレムを訪れ、前任者フェリクスのやり残していった事件、パウロの裁判の解決のために奔走します。その事情については前任のフェリクスや千人隊長のルシアからの報告によってよく知っていたと思われる。10日間のエルサレム訪問から帰ると、周髪を入れず、エタヤ原告側の要求(再度パウロをエルサレムの議会に召喚(裁判にかける))に応ずるかをパウロに尋ねます。ここで私たち読者は、今までの行きさつ、パウロの暗殺の陰謀がパウロの甥の密告とルシア隊長の迅速な判断と決断によって破られた事を知っているのに、相変らずこの謀略に固執するエタヤ側の愚かさに驚かされるのですが、パウロ救出を敢行したルシアやパウロ側の機密がよく保れていた事で袋ぬるべきかも知れません。

新任の総督フェストウスにもそれが秘されていたとすれば、エタヤ人の機嫌を気にする彼がエタヤ側の要求に屈することもあるため、パウロの方でもこの監禁期間中、わりと自由な交流が許されていたので、ルカやシラスの仲間とまたそこに長く住んでいたセリポと4人の娘たちとの交流の中で、最も安全に宿願のローマ行きが用いられるか密議がなされていたに違いありません。そしてパウロが決断したこと、カイザルに上訴することだと思われまふ。それが、この裁判がローマ皇帝の権威の下にある総督の下での裁判である以上、またパウロがローマ市民であることから最も理にかちった、自然な成り行きだったとも言えるからです。パウロのこの2年間の監禁生活は決して苦難なものだったはずがありません。ローマで獄中書簡を書いたように、このカイザリアでも彼は、講教会や個人にあてた手紙を書いたと思われまふ。今は失われてはいますが、その生活がやがて行くローマでの良い準備期間になったのは言うまでもありません。今回注目すべきことは、先回同様、総督夫妻に代って、エタヤ王とその妹との面談があり、パウロが語る証しの最後の相手が、まもなく終焉を迎えるエタヤ王朝最後の王、アグリッパ二世であったことは何れも意義深いものがあります。このアグリッパ二世はヘロデ大王の曾孫に当ります。彼の父、アグリッパ一世は12章で、ヤコブ(使徒)を殺し、ペテロを捕え牢に入れるが、天使の働きで逃げられてはいます。エタヤ民衆の歓呼の声で迎えられ、「神の声」と讃えられ、王の権力と威儀の絶頂で虫にかまれ、突然死を遂げます。(使徒 12:21-22)。その時後のアグリッパ二世になる息子は17歳でした。フェリクスの妻となった妹のドルシラは16歳、そして兄のアグリッパとともパウロに對面したベルニケは10歳下の妹であった。

このヘロデ家は、キリスト教の歴史と深く関わっている。そしてローマ帝国興隆の歴史とも深く結びかっている。ヘロデ王朝の祖であるヘロデ大王はエジプト人ではなく、隣国イタヤ人であって、当時衰退しつつもエジプトを治めていたハモン王朝の妃を妻にすることで権威付けを行い、ローマ帝国のシーザー。そしてその後継者アウグスト帝と結びつく事で権力を強化した。そして息子たちや孫たちを皆ローマに留学させ、ローマの権威筋との関係を強化して行った。大王が死んだ時息子たちは力不足だったので、エジプトの王に代ってローマが直接総督を置いて統治し、宗教や民事はエジプト議会(サンヒドリン)において治めさせたのであった。ローマ帝国はゆくゆくは親ローマの王制を復帰させるつもりで、アクリッパ二世を引き立てていたのであった。今回の箇所を読むと、フェスト総督がアクリッパ二世に気を使っていることが見て取れる。

「使徒の働き」の名場面というのはいくつかあると思う。今日の「アクリッパとバルニケは大いに威儀を正して到着し、千人隊長や町の有力者を遣え、一介の未決の囚人パウロと対峙する場面は、その一つであると思う。「大いに威儀を正して」と表現されているギリシア語は「ファンタジイ」と云う言葉が使われている。英訳では「much display」と訳されている。「大いに演出して」の意味である。「ファンタジイ」は「幻想的」とか「空想的」と云う意味である。別の英訳では「with a great pomp」(威風堂々と)という意味。また、この「pomp」には、「虚飾」とか「みせぶりかし」と云う意味もあることばである。

おそらくアクリッパ二世は、王者の服「紫色の衣」を着て、額には王を象徴する「黄金の輪」を付け、バルニケは華麗な衣装に身をつつみ、高価な宝石をいくつも身につけながら、パウロと言えは、一介の「天幕作り職人のこゝろ」質素な服装であつたに違いない。それは正にファンタジイと現実との対峙であり、「荘厳華麗だが何か虚しい請業無常」の響きと白くさせるものと素朴でつましいが永遠性を放つ「福音」との対峙でもあつたように思われる。総督フェストも前任のフェリスもエジプト人が、1) 律法、2) 神殿、3) ローマ帝国の3つを破壊しようとする罪でパウロを訴えているのは、何の証拠もなく、その点ではパウロを無罪と信じている。実際パウロが訴えられているのは宗教的なもので、それは「死んだ者(イエス)が活きている」と主張している一事であると見抜いていた。パウロは、主イエスの復活信仰のゆえに断罪されているのである。彼はその事の証(を)エルサレムばかりかローマでも行う希望で生きている。それを達成するためにカイサルに上訴した。

「私はカイサルに上訴します」と言い放ったとき、彼の目は「きつ」とローマのある方向に向けられていたに違いない。それは主イエスが自分の十字架を覚悟され、「きつ」とエルサレムに目を向けて(face to Jerusalem)言われたように。「すべての道はローマに通ず」とある。イエスの福音はエルサレムからローマへ行く道としていた。十字架を担いだ悲(みの)道で、それを見て泣く女たちに主イエスは言われた。「私のためではなく、やがてさぶエルサレムで、戦いで死んでゆく子供たちのために泣け!」と。

パウロがローマに目を向けた年(AD 60年)から、わずか10年後に主イエスが言われた事が現実になるのである。目に見える華麗な神殿は「ファンタジイ」になって消えた。アクリッパ二世がローマで学んだとき、一騎たうたうイスパニア将軍(後に皇帝になる)の息子ティトゥスが父の後を継ぎ、皇帝になり、彼がエルサレムを完膚なきまでに破壊し、イスラエル王国は滅亡した。そして彼は略奪した神殿の宝物と金とで、現在も残る、エルサレムを、奴隷にしたエジプト人の労働力を使って建てたのである。キリストの福音は、パウロがカイサルに上訴するの一声でローマへと運ばれ、そこから全世界へと運ばれて行ったのである。